【解　説】

一　石造物の見方と市内石造物の特色

宝篋印塔や五輪塔、無縫塔、板碑など石で造られた塔を石塔と呼んでいる。これらは塔であるから、規模の大小の違いはあるが、法隆寺の五重塔や薬師寺の三重塔と同じ塔である。塔は古代インドで用いられた梵語の「ストゥーパ」に漢字を当てはめたもので「卒塔婆」（そとうば）のことである。卒塔婆が略されて塔婆となり塔と呼ばれるようになった。この塔を小型化して石で造ったものを石塔と呼び、その形から宝篋印塔、五輪塔、無縫塔、板碑などと呼ばれている。今回の調査により市内で確認された石塔および石造物について、簡単に解説しておこう。

一．宝篋印塔―ほうきょういんとう―

宝篋印塔という言葉を広辞苑で引くと、「本来は宝篋印陀羅尼の経文を収めた塔であるが、後には供養塔、墓碑として立てられた。呉越王銭弘淑の八万四千塔（わが国にも渡来）が原型で、鎌倉時代以後、一定の形式が成立。石造りが多く、まれに金銅、木製もある」とある。わが国で建立が盛んになったのは鎌倉時代中ごろ以後で、室町時代に入ると小型の宝篋印塔が多数建立される。これらの宝篋印塔は供養塔として建立されたものが多く、墓碑として建立されたものもある。

現在わが国各地に分布する宝篋印塔はおおよそ天竜川を境として関西型と関東型に分けられる。関東型は最下層に蓮の花を図案化した反花（かえりばな）を乗せた長方形の基壇を置き、四面を二区画に区切っている（反花座という）。その上に基礎と呼ばれる長方形の部材を置き、四面をそれぞれ二区画に区切っている。この二区画の中に造立者銘、造立年月日（墓碑の場合は被葬者の没年を陰刻したと考えられている）、造立の趣旨等を刻する。基礎の上部は数段の段を設ける。この基礎の上に、ほぼ正方形の塔身を乗せ、四面を枠線で区切り、各面に梵字で塔四方または金剛界四仏の文字を入れる。

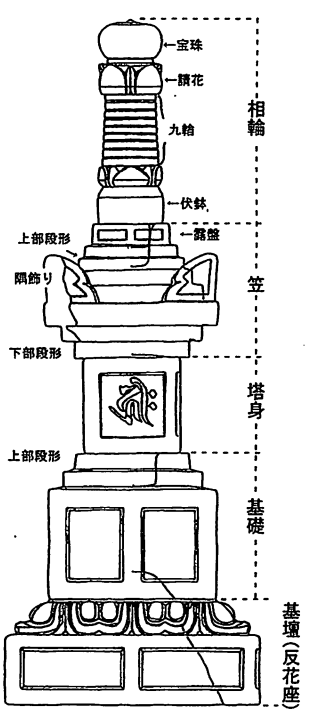
塔四方仏　　西　北　東　南

キリーク、ユ、バイ、バク、

キリーク、アク、ウーン、タラーク、（バン）

金剛界五仏

金剛界四仏の場合は塔そのものがバン（大日）と考えられているのでバンの梵字は省かれている。これらの梵字は東西南北を指しているので、塔の向く方角を示しているが、通常は建立以後長年月の



関東形式
反花が高い
基礎・基壇を２区
塔身に輪郭あり
露盤は２区

【宝篋印塔の形】（関東型）

間の地震等による倒壊などの事情で向きが不ぞろいな例が多い。

一般の人が宝篋印塔を墓石として建立することは少なく、ほとんどが僧籍にあった人か、土地の有力者や権力者の墓石が多い。現在でも宗派によっては寺院の許可がないと墓石として認めない場合がある。

二　五輪塔―ごりんとう―

五輪とは、密教の中で宇宙の万物は空、風、火、水、地が万物構成の要素であると考えられ、これを五大と称し、この五大の変化・展開によってすべてが生ずると見て、これを五輪といった。この考え方は平安時代初期には中国から伝えられており、これを塔の形に当てはめて塔婆化したのが五輪塔である。したがってこの塔はわが国固有の塔で、中国や朝鮮半島にはない。供養塔や墓碑として建立され、平安末期から鎌倉時代になると全国に広まり、貴賤男女を問わず建立が盛んになった。材料も紙に書かれたもの、木や焼き物、金属や水晶など多岐にわたるが、石製のものが多い。

塔の形は最下段に方形の地輪を置いて基礎とし、その上に球形の水輪を乗せて塔身、その上に屋根形の火輪が乗り、さらに請花（うけばな）としての半円形の風輪と宝珠型の空輪が乗っている。風輪と空輪は一石で造られることが一般的で、空風輪と呼ばれる。

小型の五輪塔は四面とも素面のものが多いが、本格的な五輪塔は各輪の四方に梵字を入れるので、その梵字を見れば東西南北が分かるようになっている。通常は四面すべてに梵字を入れることは少ないが東面だけに下図のように梵字を入れることが多い。

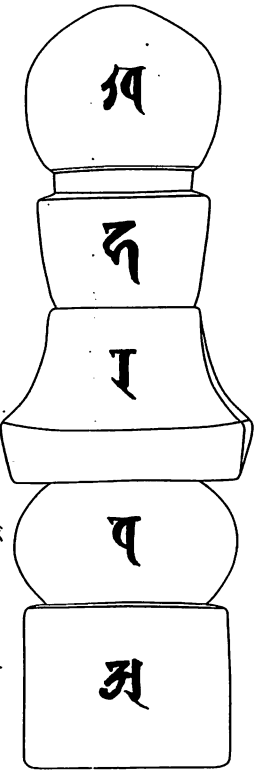
造立初期のものは木製や金属及び瓦製の板状卒塔婆であったと考えられている。現存する石塔で最も古いものは平泉の中尊寺の仁安四年（一一六九）で、ついで大分県臼杵市中尾の嘉応二年（一一七〇）と承安二年（一一七二）がある。

本市域でも鎌倉時代以後になると墓石や供養塔として盛んに造立されるようになり、今回の調査でも全石造物二八五七基のうち六四〇基を数える。特に江戸時代中頃の元禄期になると高さ五十㌢程度の小型の五輪塔が多くなる。

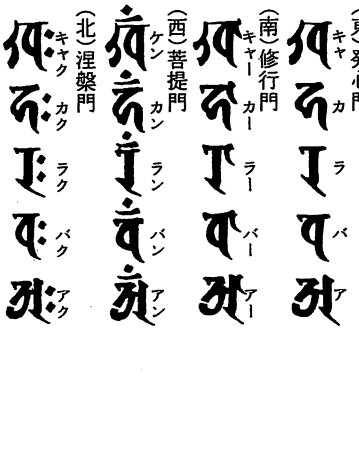
五輪塔の地輪の東面には造立趣旨、被供養者名、造立年月日等を陰刻する。

五輪塔は地震等の振動に弱く、すぐに倒壊するので、造立当初の

［五輪塔の形と梵字］



「五輪塔四方の梵字」

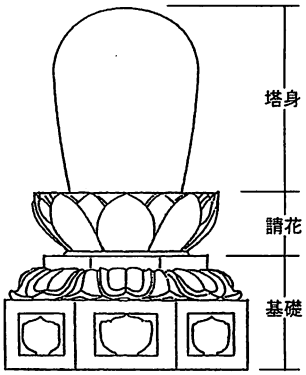


形を保っているものは少ないが、この梵字がわかれば、正しい方位に建て直すことが出来る。特殊なものでは、五つの部材を一石で造る一石五輪塔もある。戸倉に伊奈石製で高さ四四㌢、幅一三㌢の一石五輪塔（戸-戸-05-08）がある。

三．無縫塔―むほうとう―

鶏卵をさかさまにした形の塔形から卵塔婆とも言われる。一般的には僧籍にあった人の墓塔に用いられるので、寺院の歴代住職の墓地に見られる。この塔は鎌倉時代初期に宋に渡った僧によって伝えられたもので、最も初期の無縫塔は基台の上に自然石の丸石を載せただけの形である。後に荘厳化して塔の形式が整うと六角台座上に六角の軸部を立てて六角中台を重ね、反花座の上に円頭を置く形式に発展する。この形式は重制無縫塔と呼ばれるが、一般的には単制無縫塔と呼ばれて六角または円形の基台の上に長円形の塔身を置く簡素な形である。この塔の基台は蓮の花をかたどった反花座や請花座の場合が多い。無縫塔は禅宗僧侶によって造立されたが、後に他宗派の僧侶も受け入れ、やがては世俗の人々の墳墓にも建てられるようになった。

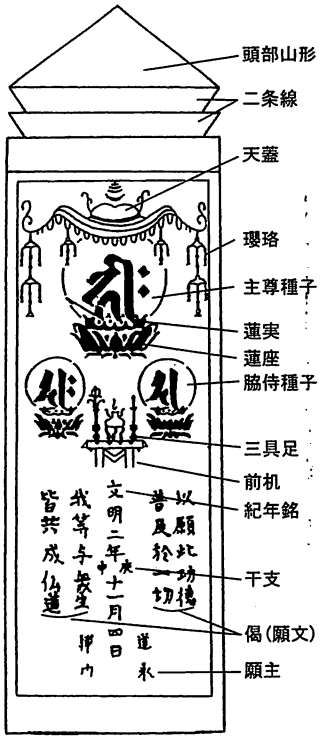
【無縫塔の形】（単制無縫塔）



四．板碑―いたび―

板碑は鎌倉時代中期以降から桃山時代に至る間に作られた石製の卒塔婆で、材料の石は手近で手に入る石材を用いるが、武蔵地方では簡単に平たく加工できる緑泥片岩が用いられ、その産地である埼玉県秩父地方を中心に関東一円に広まっていった。四国の阿波地方にも緑泥片岩が産出するので同じ形式の板碑が分布している。

【武蔵型板碑の形と各部の名称】



板碑の形式は、材料の性質によって、薄く平たい石材が造りやすいか否かで多少異なってくる。緑泥片岩製の板碑は武蔵の国を中心に分布することから、武蔵型板碑とよばれ、その形は頭部を三角形に成型して二条の線を切り込み、その下を平らに成型して身部とし、身部には主尊として仏像または仏の種子を梵字で刻み、その下に紀年、法名（俗名ではなく戒名）、造立趣旨、偈（経の有名な部分を詩の形式にしたもの）を記し、さらに装飾として天蓋（暑いインドの野外で説教をする釈迦にさしかけた日除けの笠が変化したもの）、

蓮華座（釈迦がすわった蓮の花を図案化したもの）、月輪（梵字を囲む円形）、三具足（仏に供える燭台、香炉、花瓶の三つをセットにしたもの）等を彫り込み、きわめて精緻な表現と複雑な信仰内容を表している。

板碑の主尊の表現形式によって、①画像板碑、②梵字板碑、③名号板碑、④題目板碑などの形がある。

①画像板碑は、仏像や仏塔を浮き彫り又は線刻で表したもので、仏像では阿弥陀如来、阿弥陀三尊、阿弥陀三尊来迎図をはじめ、地蔵、薬師如来などがある。仏塔は宝篋印塔、五輪塔、宝塔などの形が彫られている。

②梵字板碑は、画像に代わって仏の種類を表す梵字を刻んだもので、種子（しゅじ）という。阿弥陀如来を表すキリークが多いが、大日、釈迦、薬師、地蔵、十三仏、二十一仏などもある。

③名号板碑は、蓮台の上に「南無阿弥陀仏」の六字名号を刻むもので、浄土宗と時宗に多く用いられる。時宗の名号板碑は宗祖一遍流の立て書きを草書体で表したものと、二祖真教の楷書がある。

④題目板碑は日蓮宗の「南無妙法蓮華経」を刻むもので関東に多い。

板碑は緑泥片岩製の板碑が形も整っており、江戸周辺の武蔵国に多く分布していたことから武蔵型板碑と呼ばれて、江戸時代から研究対象となっていたが、石材が違っていても同じ目的で造られたものはすべて板碑の範疇に入れ、形状が柱状であるか板状であるかの違いがあってもそれはその用材と地方文化相による違いであって、板碑本来の本質的な違いではないという考え方で各地の研究がおこなわれてきた。武蔵国でも緑泥片岩ではない石材で造られた板碑があって武蔵型板碑とは若干形が異なる。市内の横沢を中心に分布する伊奈石（凝灰質砂岩）で作られた板碑は、石質の関係で薄く成型できないので厚みがあり、「駒形板碑」と呼ばれて、室町時代初期の応永年間を中心に多くの石塔が造られて近在に流布している。この頃信州伊那で活躍していた石工達が市内伊奈地区に移住して生産したものとも考えられている。伊奈石は江戸時代になると、石塔ばかりでなく他の石仏や石臼などにも利用され、多摩川の筏の上荷として近隣の地方に運ばれていった。この砂岩は軟質なので、風化して欠損し易い欠点があるが、加工しやすいことから、良質な鑿が少なかったこの時代には盛んに利用された。

あきる野市に分布する板碑は総数四九八基を調査したが、緑泥片岩製が四五九基、伊奈石製が三六基であり、主尊はほとんどが阿弥陀仏である。阿弥陀仏以外の主尊はバク（釈迦如来）が七基、バン（金剛界大日如来）が三基、アーンク（胎蔵界大日如来）が一基、バイ（薬師如来）が一基である。その他十三仏が一基ある。そのほか特徴ある板碑としては梵字の光明真言を彫ったものが九基ある。

そのうちの二基は双碑の形をとり、月輪に囲まれ、蓮座に乗る阿弥陀三尊と「文正二年」（一四六七）の紀年銘、紀年銘の左右に二行ずつに分かれた梵字の光明真言が彫られており、それぞれの文字の形と配列は同じである。供養者は「道金禅門」「妙善禅尼」とあり、夫婦であろう（多-草-06-34・35）。双碑とは、このように二つの板碑の種子、紀年銘等がまったく同じ形に作られているものを云う。

五　諸仏

仏の姿を像または文字で表したもので、石で造られたものは石仏と呼ばれている。これらの仏は、悟りを得ている仏は如来、悟りを得るための修行中の仏は菩薩と呼ばれ、その他に仏の使いや警護をするものを明王、或いは天と呼んでいる。これらの仏や菩薩のなかで特に数の多い地蔵菩薩や馬頭観音菩薩以外の仏を、諸仏としてひとくくりしてみた。

[仏の印相]

仏の手の形はそれぞれ意味のある形をしている。それらを印相というが、この印相により仏の種類を知ることができる。

合掌印
普通二手を胸にあて、十指をあわせる形で、金剛合掌という。弥陀三尊の脇侍の勢至や地蔵などに見られる。

施無畏印
すべての畏怖を除き、衆生に安心を与えることを示す印。次の与願印と組むことが多い。

与願印
施願印とも言う。衆生の願いを施し与える印。聖観音では右手を下げて、与願印とする。

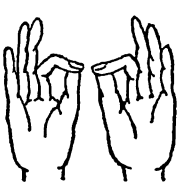
智拳印
金剛界大日如来の結ぶ印。

法界定印
胎蔵界大日如来の結ぶ印で、悟りの境地を表す。坐像の釈迦如来が結ぶ禅定印もこの印で表す。

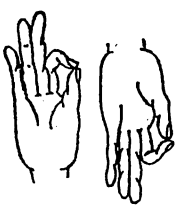
弥陀定印
弥陀如来が膝上に結ぶ定印。九品印の上生印にあたる。

明王馬口印
馬頭観音が結ぶ印。俗に馬頭印とも言う。

薬壺印
法界定印と同じであるが、薬師如来が結び、薬壺を載せる。



説法印
弥陀如来が説法する時の形。普通は両手の一指と二指で輪を作り、胸の前で結ぶ印を用い、九品印の上品中生印にあたる。



来迎印
弥陀が死者を迎えるとき示す印。板碑や石仏に多く見られる。九品印の下生印にあたる。

石仏として、像が彫られて建てられているものの多くは舟形の光背を背に像が彫られており（陽刻）、その像の姿や持ち物等から仏の種類を考えるのである。仏の像を彫ることが難しい場合は、文字塔といって像の代用として角柱状の石に文字で仏の名前を書いている。

大日如来　本来の如来像は簡単な法衣をまとい、持ち物は殆どなく身体を飾る装身具も着けない姿であるが、大日如来はまったく異なり、頭には宝冠を載せ、瓔珞、環釧、天衣などの装身具をまとった菩薩の姿である。手は法界定印または智拳印を結んでいる。

掲載資料には三基あるがそのうち一基は文字塔である（小-乙-01-33）。もう一基は、舟形光背の頂部に種子ア（胎蔵界大日如来種子）を刻み、その下に法界定印を結ぶ胎蔵界大日如来の坐像を浮き彫りする。この地で宝永三年六月三日に即身成仏した真言密教の行者大聖院龍海の墓碑と伝えられている（多-菅-01-01）。平成四年に土地の人々八十六人によって現在のお堂が建てられその中に安置された（『秋川ふるさとの道』参照）。あとの一基は所有者の都合で調査できなかった。

釈迦如来　釈迦はインドの釈迦族の王子として紀元前五六六年ごろに生まれた実在の人物で、二九歳の時に出家し難行苦行の末に悟りを得たといわれている。その後自分の弟子たちに自分の教えを説いたのが仏教の始まりである。形は頭に螺髪、印相は右手が施無畏印、左手は与願印を結ぶ。

市内には五基あるが、三基は丸彫りの立像で右手は施無畏印、左手は与願印を結んで蓮座に乗っている。他の二基は光背を背負った立像である。そのうち一基は頭部に螺髪と肉髻がある如来の形で合掌する。歴代住職墓地にあり、禅宗寺院なので釈迦如来と判断した。安山岩製で蓮座にのっている。像の右側に「龍山妙西禅尼」、左側に、「宝永五子十二月廿九日」の銘がある（多-草-06-36）。

薬師如来　如来像は頭部にブツブツと小突起（螺髪）が並んでいるのが特徴で、持ち物や手の形（印相）によって如来の種類を判定する。薬師如来は病気平癒を祈る仏であるから、左手に薬壷を持ち、印相は右手に施無畏印を結んでいる。

市内に二基（墓石と伝承を除く）あり、立像（小-乙-04-07）と坐像（増-伊-01-15）でどちらも砂岩製で胸の前に両手で薬壺を持っている。坐像も立像もそれぞれ小さなお堂に安置されており保存状態は良い。坐像は頭部に小さな破損があるが、補修されている。

阿弥陀如来　どんな人でも念仏を唱えれば、誰でも極楽浄土に往生できるという教えから多くの人々に信仰されている。阿弥陀像には三つの姿があり、①は、施無畏印と与願印を結び、坐像の形をとる。②は、坐像で膝の上に弥陀定印と呼ばれる印を結ぶ。③は、浄土から死者を迎えに来る時の姿で来迎印を結んでいる。この時は観音菩薩と勢至菩薩を脇侍として従えている。阿弥陀仏に向かって右側で、両膝をついて死者を浄土まで運ぶための蓮台を両手で捧げ持っているのが観音菩薩、向かって左側で合掌し、立て膝で座っているのが勢至菩薩である。これは来迎図の図柄で本市内にはないが、来迎板碑という板碑によく描かれている。

市内に残る一基の阿弥陀如来像は②のタイプの坐像で蓮台に乗っている。伊奈石製であるが全体に保存状態が良い。

聖観音菩薩　その形は主として三種類に分けられる。一つは丸彫りの立像で蓮台に乗る。右手は与願印または施無畏印を結び、左手に未敷の蓮華を持つ。七基ある。他の一つは舟形の光背を背負い、右手は与願印もしくは施無畏印、左手は未敷の蓮華を持つ。これも四基ある。そのうちの三基には銘があり、「文政十二年丑三月日　加藤□　なべ」（増-伊-04-01）、「宝永三年丙戌歳二月吉日　奉納秩父

西国坂東二世安楽為菩提也」「天保十四癸卯六月功徳日　百番供養清水甚左門　同徳工門　同人費立」となっている。いずれも伊奈石である。最後の三つめの形式は角柱の前面を舟形に彫りくぼめ、左手に蕾の蓮華をもち右手を添えた立像で、二基あり、一つは「文化四丁卯歳八月吉祥日　講中」（小-乙-01-32）の紀年銘がある。

如意輪観音　『観音経』によると観音菩薩は衆生のそれぞれの立場や考え方に気を配り、三十三体に姿を変えて現れると書かれている。この観音様は、思いのままに願い事をかなえてくれる宝珠（如意宝珠）と、煩悩という敵を打ち砕く武器としての輪宝を持って、人々を救ってくれると考えられ多くの人々に信仰された。その姿はかなり特徴があり、簡単に識別できる。まず手が六本あり、右手の方の第一手は頬に当てて考え事をしている姿で、第二手は如意宝珠、第三手は数珠を持っている。左手の方の第一手は大地を押さえる格好で、第二手は蓮の花（蓮華）を、第三手は輪宝を持っている。これらの持ち物が風化・摩滅して判別が難しくても、右手を頬に当て、右足を立ち膝にしている仏像を見たら如意輪観音であると思えばほぼ間違いない。市内には十五基残っており、いずれも砂岩製の坐像であるが、風化が著しい。

弥勒菩薩　弥勒菩薩は未来の仏である。釈迦の死後五十六億七千万年後に人間世界に現れて衆生を救済するために法を説く菩薩であるとされている。形は釈迦如来とよく似ており、区別がむずかしい。江戸時代に入ると宝塔を腹の前で両手で持つものや、宝塔をおく蓮華を両手で持つものなどがある。市内には五輪塔を持つ立像と坐像の二体ある（多-菅-03-33・34）。立像は頭部が後補でコンクリートで作られている。坐像は前で五輪塔を両手で支えているが頭部は別物が乗っている。

以上の仏の他に、利剣に絡み付いて剣先を飲み込もうとする竜王を彫った倶梨伽羅不動（西-代-03-02）、文字塔だが不動明王、大黒天、牛頭大権現、弁財天などがある。特にめずらしいのは奪衣婆像で、形は地蔵坐像であるが、基礎の背面に「奉建立葬頭河婆尊」とあり奪衣婆尊であることがわかる。頭部は後補で、他の地蔵像のものなのが大変残念である（西-引-04-03）。奪衣婆とは、三途の川のほとりにいて、死者の着物を奪い取り、衣領樹の上にいる懸衣翁に渡すと伝えられる鬼婆。葬頭河とは三途の川のことである。

六．馬頭観音ーばとうかんのんー

前項の如意輪観音のところで述べたように、いろいろな姿に変化する観音菩薩の一つの形である。その姿を見ると、顔が三つあったり四つあったり、手が二本であったり四本であったり、さらに多いのは八本であったりいろいろな形をしているが、最大の特徴は、顔が憤怒相であること、頭上に馬の顔を頂くこと、胸の前で両手の人差し指の先端を合わせる印（明王馬口印）を結んでいることである。多くの観音像は慈悲の相であるが馬頭観音は怒りの相である。この怒りは、煩悩でうじうじとしている衆生の目を、はっきりと覚まさせようという慈悲の心から来ていると言われている。馬頭観音は馬の頭を戴いていることから当初は畜生道に落ちた衆生を救う仏と考えられていたが、江戸時代中期頃から馬が物資の輸送に多く使われるようになると馬の安全の守り神として路傍に建てられるようになり、さらに江戸後期になると文字で彫った文字塔も作られるようになった。

地域別に造立数をみると、今回の調査では旧五日市地区で九九基、旧秋川地区で二九基が調査された。現在までに行方知れずになった馬頭観音像も多いと思われるが、この数字は両地域の人々の生活と

馬との関わりの強さを示している。江戸時代に入ると五日市や伊奈に市が開かれ、秋川上流域の村々では、炭焼き用材の栽培が盛んになり木炭の生産が盛んになった。さらに承応二年（一六五三）に五日市に定期市ができ、炭問屋ができると多量の木炭が近隣の山村をはじめ檜原村や遠く甲州郡内地方の山村からも峠を越えて運ばれてくるようになった。この輸送には多くの馬が使われ、同時に女性達も運搬業に携わったと言われている。江戸末期の五日市は炭荷の数量から逆算すると、市日には一〇〇頭近い馬が往来した計算になるという（『五日市の石仏』）。

こうした馬による木炭の運搬は、山地の狭く急峻な山道が主な活躍場所であるから、馬頭観音像もそうした山道や峠道に建てられることが多い。このことは造塔の目的が馬の交通安全と死んだ馬の慰霊であることを示している。

市内で馬頭観音像の建立が始まったのは享保十六年（一七三一）であるが、初期の頃の塔は刻像塔が多い。自然石に「馬頭観世音」と文字を入れた文字塔は享和二年（一八〇二）に現れ（多-草-05-07）、それ以後文字塔が増えてくる。特に旧五日市地区では適当な大きさの川原石が簡単に手に入るためか、この地区で文字塔が増えてくる。馬頭観音の造立者を見ると、個人で造立したものもあるが、圧倒的に多いのは講中と呼ばれる集団（仏教の信者仲間で作る集団）で造立したものである。講の内容を見ると、観音講、馬持ち連中、馬頭講、女人講、念仏講などがある。馬持ち連中や馬頭講は馬の荷役を業とする人々の集団であるから、造塔は当然の行為である。ここで注目に値するのは女人講で、女性も馬方としてこの仕事に従事していたことを示していることである。男衆が用材を切り出して炭を焼き、女衆が馬を曳いて運搬していたのであろう。険しく危険な山道や峠道を行き来する過酷な労働を支えていた女性の苦労を垣間見る思いがする。個人で造塔した馬頭観音は小型の塔が多いが、講中で造塔した馬頭観音は大型の塔が多い。これらの講中で造立した塔には名前が彫られているものが多いが、その多くはその地域の有力者である。

また、この馬頭観音が建立された場所は、馬による物資の輸送が頻繁に行われた街道筋を表しており、中には急峻な山道の危険な場所があって、当時の物資の流通を考えるのに大変参考になるものである。養沢本須から戸倉星竹に抜ける古道「横根道」には立派な馬頭観音が三基（小-養-01-53・59・60）あって、かつての重要な馬の交通路だったことがわかる。

七．地蔵菩薩―じぞうぼさつ―

道の脇に小さな祠が建てられ、中には丸坊主頭で童顔のにこやかなお地蔵様が祀られている。多くは赤い頭巾を被り、赤い前掛けや着衣をつけており、近在の人々から親しまれ大切にされていることがわかる。両手は合掌するものが多いが、左手にあらゆる願いを叶えてくれるという宝珠（如意宝珠）を持ち、右手に錫杖を持っているものもある。

地蔵菩薩は釈迦が入滅してから五十六億七千万年たって、弥勒菩薩がこの世にあらわれるまでの無仏時代に、この世に現れて六道（地獄―怒、餓鬼―欲、畜生―愚、修羅―闘争・人間、天界―喜悦）をさまよう人々を救ってくれる仏と考えられた。平安時代に流行した末法思想が広まる中で、その後の戦乱の続く室町時代に信仰された阿弥陀信仰（死後の世界の信仰）に替わって、地蔵信仰は現世利益のほかに死後の冥界にさまよう者まで救ってくれると考えられ、多くの庶民に信仰され急速に広まっていった。戦国時代には鎧兜を着け馬に乗った将軍地蔵もあらわれ、武士の間に広まった。この冥界

と現世の間を行き来して人々を救ってくれるという地蔵信仰は江戸時代になって広く宗派を超えて庶民の間に根をおろした。童顔の地蔵像の姿から、子供を安全に守ってくれるという信仰が芽生え、子育て地蔵、子安地蔵へと発展した。冥界と現世の間を守ってくれるという考え方から、民間信仰の賽の神や道祖神は地蔵菩薩であると考えられ、六道を守ってくれる地蔵という考えから六地蔵という信仰もあらわれた。江戸時代になると、冥界と現世の境であると考えられた寺院や墓地の入り口、それに村の辻などに六体の地蔵が並んだり、六角形の石灯籠型をした石幢の各面に一体ずつの地蔵が彫られたり（六地蔵石幢）、一つの面に六体の地蔵が並んで彫られたりする六地蔵が見受けられる。地蔵菩薩は人々のあらゆる悩みや願いの救済にあたると考えられ、安産、子育て、延命地蔵ばかりでなく、イボ取り地蔵や厄病除け地蔵などとして信仰され、耳垂れ、眼病、頭痛、夜泣き、夜尿など何にでも効験があると考えられた。

珍しい地蔵尊としては五輪地蔵というのがある。これは新義真言宗や臨済宗の一部の寺にしかないが舟形光背の地蔵立像に円光・身光を背負わせる代わりに、浮き彫りの五輪塔を背負わせる形で、市内には六基ある。市内に初めてあらわれた五輪地蔵菩薩は寛延元年（一七四八）に大悲願寺二四世の如環の愛弟子菊淵房が若くして京都智積院で示寂したのを悼んで、如環師が建立したものである。正面に「菊淵房法印権大僧都玉幢墓」、左面に「寛延改元戊辰秋九月十三日　於京都智積院寂」の銘がある（増-横-02-05）。この後五輪地蔵として、同じ様式の地蔵がつくられていくのである。

こうした地蔵像は、個人で建立したもの以外に講中で建てたものが多く、なかでも集落でまとまって作られた念仏講や女人講が多い。また他の石仏に比べて祠が建てられて大切にされていることがわかる。現在各地に残っている地蔵像は頭部が欠損しているものが多く、中には別物の頭部がコンクリートで接合されているものがあるが、これらの像は、明治の初めごろに全国で行われた廃仏毀釈の考え方により故意に破壊されたものが多い。

このように多くの庶民に愛され信仰された地蔵菩薩は、当市においても石仏として多く建立され、今回の調査で旧秋川地区に一三四体、旧五日市地区で一六九体を数えた。これらの数字は、個人の墓石として建立されたものは除いてある。現在でも幼子や交通事故等で亡くなった人の供養に建立することが行われている。

八．諸神

「水神宮」と彫った文字塔が三基あり、いずれも古い井戸の傍らに建てられている。いつまでも水が枯れないでいてほしいという願いで建てられたものである。現代の水道に慣れた我々にはピンと来ないものであるが、往時の人々の強い願いが込められている。

また、久保延命地蔵堂にある幼児を抱いた丸彫り坐像は、頭部が菩薩形ではない上に乳房が大きすぎることから、子育観音ではなく鬼子母神と判定した。小川久保の女念仏講中で建立したもので天保十年（一八三九）の作である（東-小-06-08）。他所にあるもう一基は、右足を立てており、右手を頬にあてた如意輪観音に似た姿であるが、乳房が大きいのと、左手に抱かれているこどもが鬼子母神の持ち物をあらわす吉祥果を持つので、鬼子母神像と判断した（西-油-02-25）。

出雲神社の境内にある「出雲宮」と陰刻した自然石（西-渕-03-01）や「出雲大明神」と彫られた角柱石（西-渕-03-03）は個人で納入したものであろう。横沢入の石山池にある高さ七六㌢、幅二八㌢、厚さ一五㌢で「山神社」の刻銘のある塔（増-横-01-04）は、中世以来この地で伊奈石を切り出し、五輪塔や石臼などを作って生

計を立てていた伊奈の石工たちが、仕事の安全と生計の安定を願って近世になって仕事場の傍らに山神を祀ったものである。

このほか、「九頭龍尊神」「土荒神」「八幡宮」「天満大自在天神」などの文字塔がある。

九．庚申塔―こうしんとう―

庚申信仰に基づいて建立された塔である。庚申とは十干の庚と十二支の申とが結びついて六十日または六十年に一回廻ってくる日や年のことである。中国の道教という教えの中に三尸（さんし）説がある。これは人間の体内に三尸という虫がいて、何時も人間の早死を願っているが、庚申の日の夜に、人が眠っている間にその人の体内から抜け出して天に昇り、天帝にその人の日常の罪過を報告する。天帝はそれを聞いてその人の死期を早めるという説である。三尸が天に昇ることを防ぎ、長生きをするためには庚申の日に身を慎み、一夜を眠らずに過ごすことが必要である。身を慎み、眠らずに一夜を過ごすことを守庚申という。守庚申を七回続けると三尸は滅ぼされていなくなると説かれている。この考え方は平安時代にわが国に伝わり、平安の貴族たちは、詩歌管弦を楽しみながら夜を明かしたが、この風習は次の鎌倉・室町時代の武士たちの間に広がり、江戸時代になると広く一般庶民の間に広がって、全国的に流行した。その間に仏教や神道の教えを中心に、多くの習俗が加わり、複合的な様相を持つようになった。江戸時代になると修験者が庚申信仰を説き、その指導で信徒集団（講中）が作られるようになる。神道の方でも「猿田彦大神」を主尊とする庚申信仰を説き、仏教の方でも「青面金剛」（しょうめんこんごう）を本尊とする庚申講というグループをつくり、庚申日には当番を決めて集まり、主尊である青面金剛の掛け軸（「お表具」という）を掲げ、その前でお勤め、飲食、世間話をして夜を明かした。これを「庚申待」といった。庚申待の行事は江戸時代の初めごろは三尸を滅ぼして禍を避け、長寿を得ようと願をかけ、熱心に信仰したが、時代が下るにつれて内容が変化していったようである。「話は庚申の晩に」といわれたぐらい話の内容は相談事や噂話が主となって社交の場となり、単調な生活のなかで気分転換の要素が大きくなっていった。

庚申塔の形は、文字塔と刻像塔があるが、像塔の場合は江戸時代に入ると青面金剛が大部分で、その像容は通常一面六臂（顔が一つで腕が六本）で、髪は逆立ち、「どくろ」を頂き、目は三眼で赤く燃え、牙を剥き出す憤怒相で、手には宝輪、綱、矛（三股叉）、剣、棒などを持った恐ろしい姿である。腕、腰、足には大蛇を巻きつけ、虎の皮の袴をはき、鬼を踏みつけている。そして庚申信仰と縁が深い山王の召使と言われた猿が従う。この猿は日光東照宮の影響を受けて、「みざる」「いわざる」「きかざる」の三猿が多く、二猿の場合もあり、基部または台座に彫られている。文字塔の場合は「青面金剛」あるいは「庚申塔」、まれに神道系の「猿田彦」と彫られている。

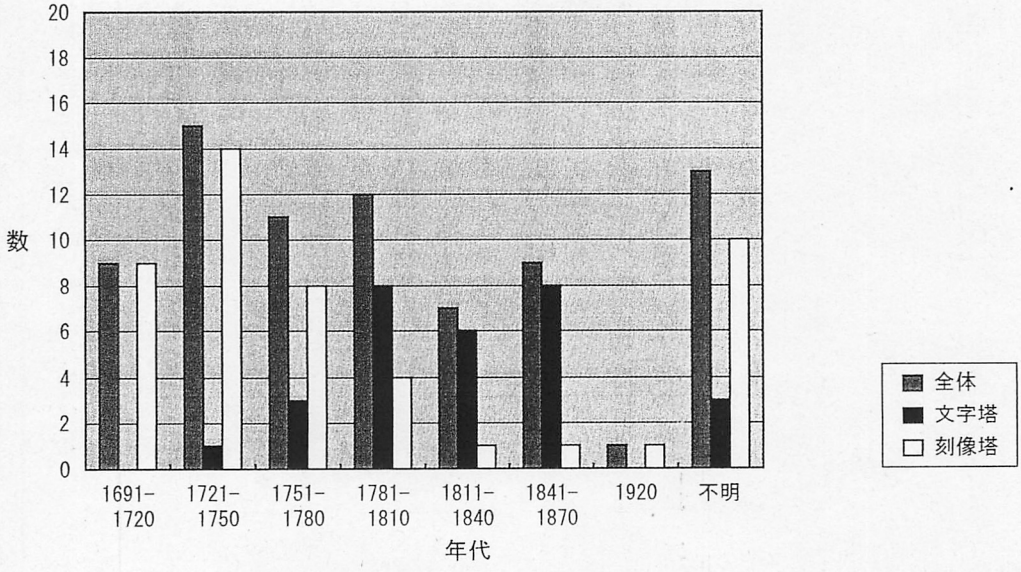
つい最近までこの庚申講は存続し、昭和六〇年代になると自治会館が会場になり、会の内容も時代とともに変化したが、「お表具」は会場に掛けておくことが行われているという。

江戸時代の庚申塔の造立は、全国的にみると、前期に始まり中期にピークを迎え、後期には衰退したが、当市の場合も五日市地区の乙津に元禄十一年（一六九八）に造立された刻像塔（小-乙-01-60）が初発で、造塔数は前期に多く、刻像塔が多い。文字塔は五日市地区に多いが、多西地区には寛政一〇年（一七九八）になって現れる（多-草-01-07）。この頃から刻像塔よりも文字塔が多くなる（次ページ上段グラフ）。

庚申塔を造立した人々は村・集団が五七、個人が四、不明が十六

［年代別にみた塔型］

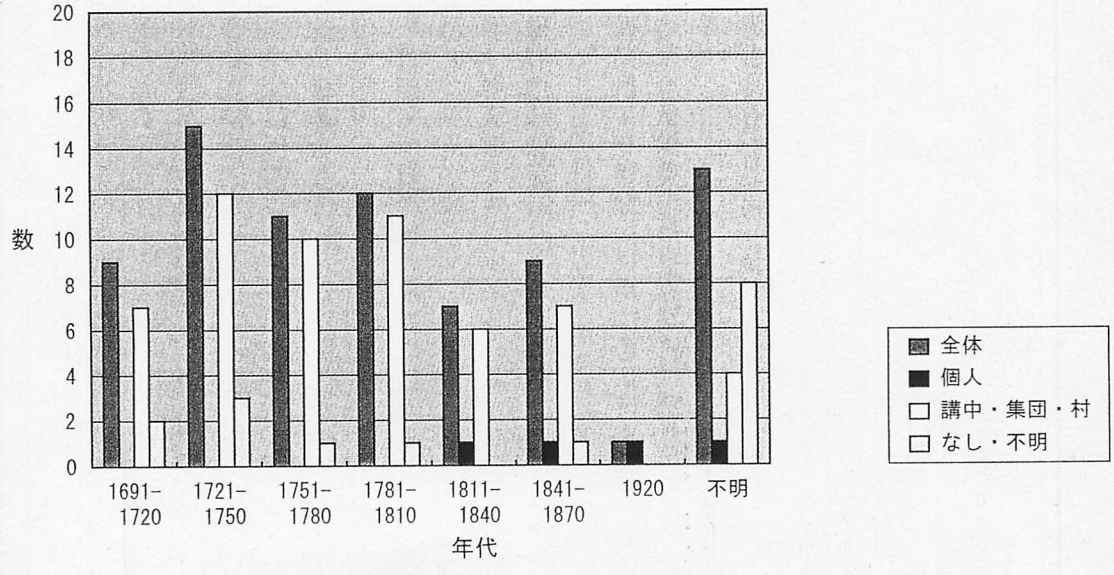
庚申塔(年代・塔型)



塔型＼年代	1691–1720	1721–1750	1751–1780	1781–1810	1811–1840	1841–1870	1920	不明	全体
全体	9	15	11	12	7	9	1	13	77
文字塔	0	1	3	8	6	8	0	3	29
刻像塔	9	14	8	4	1	1	1	10	48

［年代別にみた施主］

庚申塔(年代・造立者)



造立者＼年代	1691–1720	1721–1750	1751–1780	1781–1810	1811–1840	1841–1870	1920	不明	全体
全体	9	15	11	12	7	9	1	13	77
個人	0	0	0	0	1	1	1	1	4
講中・集団・村	7	12	10	11	6	7	0	4	57
なし・不明	2	3	1	1	0	1	0	8	16

である。集団は「講中」または「同行〇〇人」と書かれ、講中は庚申講中とおもわれるが寒念仏講中や女念仏講中もある。「導師〇〇」というのも二基あり、僧侶が導師として講を率いていたのである。

十．念仏塔―ねんぶつとう―

念仏とは、本来仏の姿や功徳を心の中に思い浮かべながら、その仏の名を唱えることを言うが、わが国では浄土教が阿弥陀如来の信仰を広め、「南無阿弥陀仏」（阿弥陀仏に帰命するという意味）と唱えることによって、誰でも極楽往生ができるという教えが広まり、このことから念仏即「南無阿弥陀仏」とされるようになった。

浄土教が浄土宗、浄土真宗、時宗などの宗派を通じて広まって行くと、人々の間に念仏を多く唱えることが盛んになり、さらに唱える回数が多くなればなるほど多くの功徳を受けられるという考え方が広まって、個人ばかりでなく、講に参加した人々の唱えた数を総和して、百万遍念仏、二百万遍念仏などが行われるようになった。この講を念仏講というが、浄土宗や浄土真宗、時宗などの浄土教の信者ばかりでなく、あらゆる宗派の間でも行われた。そして唱えた念仏の数が目標の数に達すると念仏供養塔を造立した。関東地方では江戸時代に入って造立が行われるが、当市では自然石の中央に「南無阿弥陀仏」と名号を彫り、その脇に「念仏講供養」、「念仏供養」、「寒念仏供養」の文字を彫ったものが多い。仏像を彫ったものは阿弥陀如来や地蔵菩薩・如意輪観音を彫り、「念仏供養」などの文字を添えて彫っている。

百万遍念仏を個人で行う場合は、七日間とか十日間とかの日数を決めて百万回の念仏を唱えるが、講などの集団で行う場合は参加者が車座になって、全員で大きな数珠を手繰って一粒ずつ繰り回し、一粒ごとに念仏一回を唱え、全員の唱えた数の総和が百万回になった時に満願とするやり方である。正確に百万回にならなくても百万遍念仏とする場合もあったようである。

念仏を唱える時季も冬に集中するようである。寒中に戸外で念仏を唱えながら巡行するのは厳しい修行であり、お堂の中で唱える場合もあるが、これを寒念仏という。銘文に「寒念仏講中」と書かれた念仏塔が今回調査した八五基中に三基ある。また、「女講中」とか「女中念仏供養」と書かれたものもあり、女性が講中を作って盛んに念仏供養をしていた。雨間の女念仏供養塔は、丸彫りの立像で右手は与願印、左手は未敷の蓮華を持つ聖観音像の正面に「女念仏供養」と彫り、観音像の蓮弁に三人ずつの人名を彫っている。人名は摩滅して判読がむずかしく、また紀年銘はない。刻像塔に彫られた仏像は地蔵像や観音像が多いが、油平には右手に錫杖を持つ丸彫り立像の地蔵像があり、地蔵本体背面には「奉加施主同行男女五十七人」、左側面には「奉造立地蔵菩薩念仏講中　男女四十七人大菩提」と彫られ、相当な大人数で念仏塔を建立したことがわかる。山田にある寒念仏供養塔は自然石に「寒念仏供養　元禄十一戊寅十二月初五日」「武州多麻郡　網代村同行　山田村同行　引田村同行　施主」とある（増-山-05-23）。西多摩の寒念仏塔は青梅市金剛寺の寛文六年（一六六六）、日の出町富士塚地蔵堂の貞享元年（一六八四）が古く、ついでこの元禄十一年（一六九八）となる。徳家徳治氏の、西多摩の寒念仏信仰・造塔は青梅から始まり南下していった、という説を証明する貴重な遺品であると考えられている。

千日供養といって千日間の念仏供養を行って満願を記念して建立した念仏供養塔もあり、伊奈地区の千日堂に享保十四年（一七二九）銘の大型の宝篋印塔型で作られたものがある（増-伊-05-34）。銘文は欠損した部分があって詳細は不明であるが、千日供養を発願した者を伊奈村の念仏講が協力して助け、行を行ったものであろう。

千日堂という名称も千日供養を行ったことから付いた名称かもしれない。

「南無阿弥陀仏」という名号を刻んだ塔を名号塔という。念仏塔として造立されたと考えられるものが、市内には十三基ある。この塔は墓石として造立される場合もあるが、墓石の場合は戒名などが名号の脇に刻まれているので区別できる。これらの念仏塔は自然石以外は伊奈石製である。

念仏の中には、当市では確認されていないが、「踊り念仏」というのがあり、信仰を同じくする人々が集団で念仏を唱えながら踊り、法悦の境地に入るものである。空也上人や一遍上人によって広められ、室町時代以降、京都を中心として全国に広まった。

十一．経典供養塔―きょうてんくようとう―

法華経や光明真言を多数回読誦したり、書写したりすると大きな功徳が得られるという教えは、平安時代から貴族の間で行われていたが、江戸時代になると一般庶民の間にも行われた。一定の回数読誦すると、これを記念して読誦塔を建立した。また、各種の経典を書写し、書写の行が完成すると書写塔を建立した。「大乗妙典」と刻まれた塔を建てるが、この経典は大部分が法華経である。「大乗妙典」とは衆生を迷いから悟りの世界に導いてくれるその教えを記した経典のことで、本来は大乗仏教の教義を記した経典全体を指すのであるが、一般的には法華経（妙法蓮華経）のみを指している。五日市地区の留原に、「奉読誦大乗妙典五百部」（元文五年）と刻まれた自然石の石塔がある（五-留-01-20）。増戸地区の網代に「石経供養塔」（増-網-03-09）、西秋留地区の代継に「法華経千部読誦供養　一字一石」（天保五年）と刻まれた自然石の塔がある（西-代-02-37）。これらの石経または一字一石というのは、法華経の経文を一石に一文字ずつ書いたもので、紙に書写するよりもはるかに大変な行であったと思われる。但し、これらの経文が書かれた小石が出土していないので、正確なことは不明である。

市内にはこれら経典供養塔が三六基あるが、自然石に文字が刻まれているものが十四基あり、他は角柱塔、光背型で、丸彫りの陽刻像が五基ある。

光明真言供養塔としては、高さ六〇㌢、幅三九㌢の自然石の上部に梵字でバン（大日如来）を彫り、その下に梵字で光明真言を彫って、「奉唱光明真言百万遍供養塔　安永九年子十一月日　施主村中」と銘を彫ったものがある（多-原-01-05）。

変わったところでは、高さ一一四㌢、幅二三㌢、厚さ一七㌢の角柱型で、正面の上部に家紋を彫り、その下に「奉唱」、二行に分けて「弥陀名号　壱千五百七十七万二千五百遍」「諸佛真言　六千四百三十六万八千二百遍」、さらに、その下に二行に分けて「文辰二月中」「供養塔」「九月口唱終」、裏面に「干時嘉永二年　屠維作噩応鐘十九日　松村六左エ門　造立」とある（増-三-01-20）。奉唱の回数を区切りの良い数で止めるのではなく、期間を定めて唱える方法で行ったのであろう。

十二．廻国・巡拝塔―かいこく・じゅんぱいとう―

廻国とは、書写したお経（法華経）を納めながら諸国を巡ることである。書写した六十六部の経典を持って六十六ヶ国を廻り、国ごとに代表的な社寺一箇所に一部ずつ法華経を納めることを六十六部廻国供養といい、この経典を納めて歩く者を六十六部と呼び、略して六部と呼んでいる。六部が廻国を終了して建てた塔が廻国塔である。六部は多くは僧侶であるが、中には熱心な在地の信者もいる。全国を廻って歩くのは大変な難事であるが、これが厳しい修行と考

えられた。六部に喜捨すると功徳が得られるといわれ、六部はほとんど無費用で旅ができたという。

巡拝とは各地の霊場を参詣して廻ることである。参詣の際にお札を納め、朱印を受けるので、これら参詣する霊場を札所と呼んだ。この霊場は観音霊場を指しているが、観音は身を三十三に変化させて人々を救うという考え方から、三十三ヶ所巡拝が行われるようになったといわれている。当初は京都を中心とする西国三十三ヶ所を廻るもので全国から参詣者が集まったが、江戸時代になると関東地方でも盛んになり、坂東三十三ヶ所の観音霊場は参詣者で賑わった。そして人々の便宜を図るため、一箇所に霊場を縮小して、三十三ヶ所を廻り易くした秩父三十三ヶ所が設けられたが、秩父だけは一霊場増やして三十四ヶ所とし、西国、坂東、秩父をすべて廻ると百ヶ所となり、百番巡拝として江戸時代に盛んに行われるようになった。秩父のように、比較的狭い地域に三十三ヶ所の観音霊場を設けて、巡拝の便宜を図ったことから、さらに進んで一寺の境内に三十三体の石仏の観音を配する例も出てくる。

当市内に分布する廻国・巡拝塔は七一基を数えるが、百番供養塔が多い。また、山岳信仰として、「羽黒山・月山・湯殿山」の参詣記念塔や、「四国八十八ヶ所供養」（四国遍路）もある。山岳信仰の羽黒山・月山・湯殿山信仰の巡拝塔は四基あるが、遠く山形県まで参詣に行ったのだろうか。四国八十八ヶ所のお遍路を達成した記念塔も一〇基ある。

これらの廻国・巡拝塔は文字塔が多いが、像塔もいくつかある。舟型光背を背負った聖観音像が四基、舟型光背を背負った如意輪観音像が三基、丸彫り立像の地蔵像が三基、自然石浮き彫りの地蔵立像が一基ある。丸彫り立像のうちの一基は、右手に錫杖、左手に宝珠を持つ丸彫り立像の地蔵像で「奉□大乗妙典　六十六部供養」と彫られた廻国塔は実際に経典を持って全国を廻った後に建立した塔であろう（東－小－02－58）。「百番供養」と彫られた塔も多いが、秩父・西国・坂東の百ヶ所の霊場を廻った後に、建立したものと思われる。自然石の文字塔もあるが、大部分は伊奈石で作られている。

十三．万霊塔―ばんれいとう―

多くは自然石や角柱型の文字塔である。まれに地蔵陽刻塔がある。寺の入口あたりに「三界万霊塔」と刻まれた自然石または角柱状の石が建てられる。三界とは仏教の言葉で、欲界（食欲、性欲等の欲の世界）、色界（物質の世界）、無色界（欲も物もない世界）を指すが、過去、現在、未来の三つの世界を指すこともある。三界万霊塔とは、この世の生きとし生けるものすべての霊を、この塔に宿らせているという意味を持っている。「三界万霊等」と書いてあるものもあるが、「等」と「塔」は音は同じでも「等」と書いてある場合は、万霊及びこれに類するもの全てを含むという意味である。この塔を回向することによって、誰もかれも、鳥や獣など全ての霊を供養することができるという意味で建てているのである。市内には六二基ある。「三界万霊」と彫り、右側面に「毎日晨朝入諸定入諸地獄令離苦」、左側面に「無仏世界度衆生今世後世能引導」という「延命地蔵経」の偈を彫り、「宝永七庚寅天五月二十一日」の銘があるもの（五－五－08－04）をはじめ、大半は文字塔だが、他に十六基の地蔵陽刻像の万霊塔がある。舟型光背に如意輪観音を陽刻し、前出し部に「三界万霊」と刻んだものも一基ある。

十四．月待塔―つきまちとう―

庚申信仰と共に、日本各地に広く行き渡っている民間信仰であるが、その由来はあまり明確ではない。月は往古から人々の生活に密

接に結びついており、月に関する伝説や説話をはじめ、明治六年に太陽暦が導入される以前は月の満ち欠けが暦であり、日常生活の中で月が大きな意味を持ってきた。

月待ちとは月を祀るという説と月の上がるのを待つという説などいろいろあるが、陰暦十七日の夜の月を「立ち待ちの月」、十八日の月を「居待ちの月」、十九日の月を「寝待ちの月」、二十日以後の月を「臥し待ちの月」ということから、月を信仰の対象とし、また月の出を待つという二つの面が習合したものであろう。石塔に現れた月待ちは室町期に建立された板碑に「月待供養」と刻まれて阿弥陀如来や、阿弥陀三尊の像あるいは種子、または十三仏や勢至菩薩の種子を刻んでおり、その数は多く、仏教の中に深く定着していたことがわかる。月待ちの本尊は十二天の一つ、月天子とされることが多く、一般には月天子の本地仏である勢至菩薩を祀ることが多い。勢至菩薩の有縁日は「三十日秘仏」の配置から二十三日にあたり、月待ちに二十三日が重要視されたのであろう。

月待ちの行事は江戸時代になると所定の日（二十三日が多い）に講の人々が集まって飲食をしながら月の出を待って、月を拝む形が多くなり、月待ちの記念に、あるいは礼拝祈願の対象に供養塔を建てることが広く行われるようになった。当市にはないが、神道が盛んな地域では、二十三夜待ちの本尊として月読み尊（月夜見尊）を祀るところもある。また、二十三夜塔だけでなく、地域によっては、二十二夜塔、二十一夜塔、二十夜塔、十九夜塔、十八夜塔、二十六夜塔などがある。主尊も如意輪観音や聖観音、子安観音などがある。

市内に分布する月待塔は一〇基あり、すべて「二十三夜」の文字が彫られた文字塔である。これらのうち丁寧な作例が養沢にあり、大型の台石に乗る高さ九二㌢、幅五二㌢、厚さ三四㌢の自然石で、碑の上部右に満月を表す円形とその左に三日月を並べ、その下中央に勢至菩薩の梵字サクを彫り、さらにその下に「二十三夜」と大きく陰刻し、右面に「天保十五辰九月吉日」、左面に「谷合四良右エ門　高倉山薬王院　信全」とある（小-養-01-86）。

十五．道標―どうひょう―

いわゆる道しるべである。「右　〇〇みち　左　〇〇みち」などと道路の行き先を記したもので、特別な社寺の案内表示以外は宗教的な意味合いはほとんどない。石造物としては実用品で、現代のように道路が整備されるに従い邪魔者扱いされ、散逸や廃棄されるものが多い。しかし、古道に建てられていた道標は、かつてその道がその地域においては重要な道であったことを教えてくれる貴重なものである。当初から道標として作られたもの以外に、地蔵菩薩像や常夜灯の余白部分に行き先が彫られているものもある。現在では都市計画道路や、バイパス道などで昔からの往還が忘れられていく中で、往時の貴重な記録であると同時に、歴史民俗資料として保存していかなければならないものである。

今回の調査で行き先案内としての道標が十九基、新道や橋の供養碑が六基記録された。新道や橋の供養碑は広い意味で道標と考えても良かろう。

御岳山の山道の案内道標が五基ある。一つは高さ一二九㌢、幅五四㌢、厚さ三四㌢の大型で、正面に「御嶽山道供養塔　弘化四未年四月吉日　村々　万人講　施主　世話人天野儀左エ門　岸野喜兵衛　岡部助之丞　谷合四郎左エ門」と彫られている（小-養-01-89）。他に高さ八一㌢、幅三〇㌢、厚さ二一㌢で正面に「明治廿四卯年五月立之　右みたけ山道　是ヨリ四十丁　木住野半吉」の銘をもつものがある（小-養-08-07）。現在は養沢の養沢神社鳥居前にある。

道標のなかに青年会が作ったものが三基ある。これは、明治の中ごろから、多摩地域の各村々に青年会が組織され、祭礼の準備・進行、学校の運動会の手伝い、学習会活動などを展開していくが、大正期から昭和一〇年代にかけて、道標の整備を各地でおこなっている。東秋留村青年会小川支部で建てたものは、高さ六九㌢、幅一五㌢の角柱で、左面に「左　野辺草花方面」、正面に「右　高月　丹木　雨間　五日市　方面」、右面に「大正六年一月建之」と彫られている（東-小-01-14）。雨間切欠青年会による道標は、正面に「→　雨間渡船場ヲ経テ八王子方面　←　瀬戸岡ヲ経テ青梅方面」、右面に「→　二宮ヲ経テ福生方面　←　牛沼ヲ経テ五日市方面」、裏面に「御成婚記念」、左面に「雨間切欠青年會」と彫って、建てた日時は彫られていない。現在は秋留野公園南側入り口付近に建っている（東-雨-01-52）。

十六．灯篭―とうろう―

灯篭の起源は仏前に供える灯明台として古来寺院に置かれていたものといわれている。戦国時代に茶道が発達して個人の庭園にも用いられ、装飾的な要素も入って様々な形態を生んだ。江戸時代には常夜灯が作られ、町中、および神社の参道や入口に置かれるようになった。神社の境内に置かれたものは御神灯と呼ばれる。

これらの灯篭は、ほとんどが伊奈石で作られており、長い年月の間に倒壊したり、移動させられたりしたためか、破損や風化が著しい。小宮神社にある御神灯は高さ二〇四㌢、幅九四㌢の大形で、玉石を積んだ基礎に乗った立派な造りであり、向かって左側の灯篭の正面には「奉献御神燈　願主　八王子　和泉屋宗兵衛」、左側面に「天保十五年　甲辰孟春」の銘が入っている（多-草-09-02）。この小宮神社は『秋川市史』によれば、平山季重の建立という伝説もある古社で、近世においても小宮領八〇〇石の総鎮守として重きをなし、領内の信仰も厚かった。この神社に八王子の商人が寄進しているのは、当神社の信仰が近隣の村々まで広がっていたことをあらわしているのか、あるいは本人が草花地区の出身者であったか今は知る由もない。阿伎留神社の正徳三年銘の灯篭は高さ二一四㌢、幅八〇㌢で、現在は川原石をセメントで組んだ方形の台座に乗っており、向左面に「五日市町土屋勘兵衛尉　宗泰」、向右面に「正徳三癸巳稔霜月吉祥日」、正面に「奉造立石燈籠」とある（五-五-04-01）。『五日市の石仏』によれば、「この奉納者は甲斐の武田氏旧臣の系譜を伝える五日市村の名主で、ここに「町」と名乗ったのが面白い。「町」と言うからにはこの一八世紀初頭五日市の市も順調に栄え、炭荷を扱う店舗等が多少なりとも、軒を連ねた状況が想定されるからである」といっている。社会経済史の上からも注目されることがらである。

十七．手水石―ちょうずいし―

神社の本殿脇に大きな石製で、水を貯め柄杓を添えたものがあって、手を洗ったり、きれいな水が流れ込むように造ってあれば口をすすいだりして、身を清めるための施設である。

総数十九基を調査した。ほとんどが砂岩（伊奈石か）製で、風化による亀裂や破損が著しく、現在は水を張ることはできず、針金を巻いて補強しているものが多いが、大形の自然石（安山岩）の上部を刳り抜いて水を張ったものもあり、完形品として現在でも使用可能なものもある。多くは正面に「奉納」と大きく彫り、他の面に「嘉永五子三月日」（一八五二）、「文政三年庚辰六月吉日」（一八二〇）、など江戸時代中期以降の年号が彫られている。興味を引くのは、菅生の正勝神社にある手水鉢で、基礎石からの高さ五七㌢、幅八四㌢、

奥行き四一㌢と大形で、正面に大きく「奉納」、右面に「天保十四卯年七月吉日　若者中　氏子中」、左面に「武刕多摩郡菅生村　世話人　岡部松蔵（他二人）」、裏面に「信陽高遠　石工保科保正」と石工の名前を入れている（多-菅-02-03）。この保科保正は青梅市住吉神社の灯篭にもその名を残しており、信州石工が出稼ぎに来ていたことを物語る資料である。当市の伊奈との係わり合いがあったのであろうか。基礎は別物であり安政七年の作で、廃寺となった泉蔵院の遺品である。

十八．石祠―せきし―

石祠は形の上から幾つかの形式に分類できる。一つは平面形が四角で、宝形造り、または切り妻型の屋根をもつもの、他の一つは、平面が長方形で流れ造りの屋根を持ち、前に屋根を支える柱が二本立つものなどがある。前者は寺院のお堂が原型であり、後者は神社の社を模している。前者は石殿、後者は石祠と呼んで区別しているが、用途は変わらないようである。その他寄棟造りや入母屋造りのものも見られる。

市内では三五基調査されているが、造営の目的は「屋敷神」、「白山妙理大権現」の社殿代わり、「天王宮」（寒念仏供養塔）、「稲荷社」、「六地蔵」、「伊奈の市神様」、屋敷の「稲荷社」、「水神様」など様々である。寛文年間より造営される。市内では特定の目的があってつくられたとは思えないが、山梨県の国中地方には多く、墓石、屋敷神などに用いられている。

十九．顕彰碑、記念碑、文学碑

これらの碑は大部分が明治以後に建立されたものである。

顕彰碑は主として個人または団体の事績を顕彰するために建立した碑で、ここでは社会・経済史上特筆に価するもののみを取り上げる。まず挙げられるのは「峰章之碑」である。明治時代に名医といわれた海老沢峰章の顕彰碑で大正九年に建立され、高さ二九三㌢、幅一二七㌢、厚さ一五㌢の大形の碑である（西-引-06-07）。海老沢峰章は明治初年のころ父のあとを継いで引田村に開業し、「仁医」として近郷に聞こえた。彼の業績については『秋川市史』「人と事跡」に詳しい。また別に、彼の人となりや業績を称えた碑があきる野学園の南方にあり、「ゑびさハみち」と彫られている。引田村の医者宅までの道標を兼ねた顕彰碑である（西-代-01-05）。

日清・日露戦争の従軍・戦死者慰霊碑が明治三六年から四〇年にかけて五基建立されている。西南戦争の従軍記念碑があるのは珍しい。第二次世界大戦の「忠霊塔」の建立は昭和二九年ごろからで三基ある。

教育者を称えた碑も幾つかある。変わったところでは、「ところ芋の碑」というのが戸倉の光厳寺にあり（戸-戸-05-28）、市の歴史資料として市指定文化財になっている。指定文化財にはなっていないが西多摩地方で特産物となっている「のらぼう菜の碑」もある（五-中-03-03）。

記念碑として挙げられるのは、「境界変更記念碑」がある。切欠地区にあって、この地が元は八王子市高月町に属していたことを示す貴重な記念碑である（東-切-01-21）。『秋川市地名考』によれば「昭和四十六年四月一日、八王子市高月町切欠地区が、行政区域変更で、当時の秋多町に編入されて秋川市となって現在に至っている。編入の理由は切欠は江戸時代以来高月集落の飛び地のような位置であった。八王子市に属していても、住民は生活上種々の不便があったので、その解消のため秋多町に編入となったのである。編入当時の戸数は二十六戸、人口は百二十人、面積は四十一、六ヘクタール

であった」とある。

草花地区の折立下耕地に立つ水田復旧記念碑は、明治四〇年と四二年の二度にわたる多摩川の大洪水で流出した水田の復旧工事の完成を記念した碑である（多-草-01-11）。塩野半十郎氏の著書『多摩を掘る』に工事の経緯が詳しく述べられている。

二十．その他（聖徳太子碑、二宮尊徳碑、狛犬など）

かつて第二次世界大戦のころ各地の小学校で建てられた「二宮金次郎像」は戦後の混乱期に多くは廃棄され姿を消したが、西秋留小学校に一体保存されている。台石はコンクリート造りで、薪を背負い、本を読んでいる姿がよく残されている（西-代-01-11）。

石幢の竿が二本ある。石幢とは灯篭によく似た建造物で竿の上に火袋に似た龕を乗せ、龕の中に祀る本体を入れ、笠を載せて最上部に宝珠を乗せたもので、多くは地震等で倒壊し、原型をとどめたものは少ない。祀る本体に六地蔵が陽刻された六角柱が入れば「六地蔵石幢」で、同じように七観音が入れば「七観音石幢」である。山梨県には多いが、東京都では少ない。一つは菅生の宝蔵寺の墓地にあり、元は日の出町松尾の松沢寺にあったものと思われ、現在は持ち主の転居に伴い宝蔵寺にある。銘は正面に「奉造立六道能化大菩薩□」、左に「元禄二□四月十四日武州多麻□」、右に「願以此功徳普及於一切我等□衆生□□」（法華経化城喩品の偈）と彫られ、銘から六地蔵石幢であることがわかる。竿には翼のような張りがあって輪廻車を模したものであろう（多-菅-07-46）。もう一基は戸倉の光厳寺にあって、六角柱の灯篭の可能性があるが火袋が失われ笠には蕨手があって、明暦三年（一六五七）の銘がある（戸-戸-05-32）。

茶臼が四基ある。そのうち下臼が一基あって、日常生活具であるため銘はないが、茶葉を粉に挽いた抹茶が流通するようになる江戸初期以前に作られたものであろう。現在は四基しかないが、植木鉢の台に使われたりして往時はよく見かけたものである。火薬の原料の硝石を挽くものとして茶臼を用いたという説があり、城跡や大名家の跡から出土するものもある。

（持田友宏）